

まえがき

四月二七日は「哲学の日」といって、紀元前三九九年のこの日に、古代ギリシアの哲学者・ソクラテスが亡くなっている。哲学の教師をしていたソクラテスは、対話をして相手に無知を思い知らせようとしたが、余計なお節介が災いし、相手から訴えられて死刑判決を受けてしまった。そこで弟子たちは、逃げるようにと勧めたものの、ソクラテスは法に従って獄中で自ら毒杯をあおって死んでしまった。ほんとうの話なのか作り話なのかはわからないが、哲学者の生き方としては筋が通っているように思う。当時の人たちから見ても愚かな生き方だったかもしれないが、でもそのような生き方をし、そして死に方をする人がいたことは、いまでも記憶にとどめておいてよいだろう。

さて、本書は、ソクラテスの死をまねて哲学者の生き方をしている人たちの話である。ただし、こちらは実話であって作り話ではない。学問を守るために、教育を守るために、表現を守るために、戦ってきた「学者」たちの希少な物語である。かつては「象牙の塔」と呼ばれた大学の中で、学生を相手に問答を繰り返してきた教授たちが、どのような生を受け、どのような法に従い、あるいは法に逆らって、そして最後には、どのような死を遂げるのかを、しっかりと見とどけていただきたい。

本書は、六つの章からなり、哲学から始まり倫理で終わる。

序章「大学教授とは何か？」は、哲学者を通して大学とは何かを問い、そして教授とは何かを問う、哲学的な問題提起である。第一章「明治学院大学「授業盗聴」事件とその後」は、大学が教授に無断で授業を録音し、無断録音を告発した教授を解雇した事件である。第二章「大学人の理性の「公的使用」」は、明治学院大学事件を受けて、大

学本来の公共的なあり方を構築するための積極的な提言である。第三章「国立大学法人化による教授会運営の変化」は、法人化した大学運営と弱体化した教授会自治の帰結としての宮崎大学事件である。第四章「岡山短期大学「障害者差別」事件」は、大学が学生のクレームを利用し、視覚障害をもつ教員を教壇から排除した事件である。終章「人間的〔学問の自由〕を求めて」は、軍産官学連携へ向かう昨今の大学に対し、人文・社会科学による倫理を構築する提言である。

以上のように、本書は、日本の大学が直面する危機を知り、それを乗り切ること、大学における学問・教育・表現の自由を守ろうとする戦いの書である。

編者は昨年、『大学における〈学問・教育・表現の自由〉を問う』法律文化社、二〇一八年）を刊行した。これは、憲法学者による意見書だった。これを理論編とすれば、本書はその実践編にあたる。さらに、続刊を予定しているので、執筆を希望する読者は、編者(yorikawa@gmail.com)まで問い合わせていただきたい。

編 者